

情報のなわ張り理論から見た「おめでとう」

岩 畑 貴 弘

1. はじめに

2001年10月6日、プロ野球セントラルリーグのヤクルトスワローズが4年ぶりのリーグ優勝を果たした。そして、それまでチームを率いてきた若松勉監督の優勝を決めた後のインタビューにおける発言は、当時新聞やテレビでも大きく報道されたので人々の記憶にもまだ残っているであろう。優勝の瞬間に立ち会って沸き立つファンに、マイクを通して次のように言ったのである。

(1) ファンの皆様、本当に、、、おめでとうございます！

若松監督のこの一言に球場は一層沸きあがった。

ファンが喝采をし、その晩そして翌日の報道においてこの発言が大きくとりあげられた理由のひとつに、「意外性」があることは疑いない。多くの場で言われたり書かれたりしたように、上述の場面では監督なら以下のような発言をするのが最も普通であろう。

(2) ファンの皆様、本当に、、、ありがとうございました！

しかし、(1) のようなある意味奇妙な、しかし個性的な発言は、若松監督の人柄を表す言葉として人々の注目を集め、当時いくらかの話題となった。

野球談義はさておき、言語学的に見て注目すべきは、(2) が優勝の場面におけるインタビューにふさわしい言い方であるのに対して、何故 (1) の発言は奇妙に聞こえてしまうのかということである。まず即座に思いつくのは、ファンが優勝を果たしたわけではないので、ファンに向かって「おめでとう」とは言えない、という説明かもしれない。しかし以下の例を見れば、その説明が妥当でないことが即座にわかる。

- (3) (ヤクルトの優勝を知った人が、嬉しそうにしている大のヤクルトファンに向かって)

ヤクルト優勝したんだってね。僕は野球のことはよくわからないけど、ま、とにかく嬉しそうだね。おめでとう。よかったね。

大のヤクルトファンであれば、ヤクルト優勝に向けて一生懸命応援したであろうし、それゆえ他人から「おめでとう」と言葉をかけられるに十分値する。そして実際に (3) の例は何の不自然さもない「おめでとう」の使用例である。したがって、「ファンが優勝したわけではないから (1) の例は奇妙に聞こえる」という説明は成り立たないことがわかる。

それでは何故上記の例 (1) は奇妙な感じがするのであろうか。また、それと平行してなぜ (3) は問題のない「おめでとう」の使用例なのであろうか。筆者の知る限り、この違いに関連した説明は今までなされたことがない。明らかに言えるのは、「おめでとう」というのはいわゆる例えば「ジョンは学生だ」や「昨日北海道では大雪が降った」などとはかなり異なる種類の文・表現であることである。いわゆる「日常言語学派」(Ordinary Language School) の Austin (1961) は、言語の行為的側面に着目し、発

話には3種類のレベルがあると分析した。それらは：

- (4) 1. 発話行為 (locutionary act)・・・ある文を発話するという行為そのもの
2. 発話内行為 (illocutionary act)・・・ある文を発話することによって、命令・依頼など、文字通りの意義とは別の行為がなされること。「この船をエリザベス号と命名する。」と発話すれば、その字義とは別に、その瞬間に命名がなされるということを意味している。
3. 発話媒介行為 (perlocutionary act)・・・発語内行為をしたことによって、何らかの影響を聞き手に及ぼしたこと。

発話行為理論 (Speech Act Theory) の区分にしたがえば、「おめでとう」と発話することによって、話し手が聞き手を祝福するという気持ちが伝わる、すなわち「発話媒介行為 (perlocutionary act)」をなしていると言えるであろう。

「おめでとう」が発話媒介行為をなす表現であるということは疑いないようであるが、しかしながらそのことは(1)の発言における奇妙さを何も説明しない。そこで、まずは「おめでとう」という言葉の使用法で説明してみよう。

- (5) 「おめでとう」は、その言葉が向けられる人(々)に社会通念上「おめでたい」と思われることが起こった場合に、祝福の気持ちを伝えるために使用される表現。

このようなものを「おめでとう」の用法として考えることが可能であろう

し、実際 (5) のような説明は至極常識的なものに聞こえる。しかしながら、(1) の場合、熱心なヤクルトファンにとって、自分たちが心から応援してきた球団が優勝したというのはもちろんおめでたいことであって、そのことに対して「おめでとう」と言われても何も問題ないはずである。そして (3) の文が示すように、実際場面が変わればヤクルトファンが「おめでとう」と言われることには何の問題もないことがわかる。つまり、(5) のような説明は常識的かつわかりやすい説明ではあるが、少し詳しく見ると実際の現象を説明できないのである。

これらの疑問に体系的かつ理論的枠組みの中で答えを与えるため、本論文では神尾が一連の著作の中で提唱した「情報のなわ張り理論」を用いて検証してみたい。

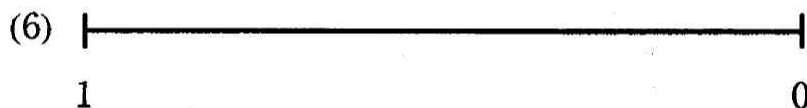
2. 情報のなわ張り理論の概観

「情報のなわ張り理論」は Kamio (1979) によって初めてその内容が紹介された後、神尾 (1990) の詳細にわたる著作によって展開され、その後も Kamio (1994)、Kamio (1995)、Kamio (1997a)、Kamio (1997b)、神尾・高見 (1998)、Kamio (2001)、神尾 (2002) などの研究において势力的に展開されてきた。情報のなわ張り理論は、その内容、それを枠組みとした言語事象の説明ともに大変知己に富み、また啓発的なものであった。その独創的な内容がゆえに他の語用論の理論や言語理論との関わりはわかりにくい点はあるが、それにもかかわらず理論は大きな脚光を浴びた。また、その枠組みを利用した、他の言語事象の分析も多く発表された。岩畑 (1991) や中園 (1992) は日本語の応答・相づち表現を分析した。房 (2000) は、情報のなわ張り理論を用いた挨拶表現を研究し、その他にも坂本 (1993)、松浦 (1992)、また最近のものとして平 (2004)、服部 (2004) など、

様々な適用例がある。

情報のなわ張り理論を援用して言語事象の解明に努めた研究の他に、理論そのものを検討した研究も、Muraki and Koizumi (1989)、金水 (1991)、岡本 (1996)、伊藤 (2003) などいくつか存在する。実際に、Muraki and Koizumi の結論ならびに伊藤 (2003) の草稿を通して神尾も自説を修正したようである。情報のなわ張り理論の修正を提案するこれらの研究はどれも説得力があり、実際に理論の修正・枠組みの変更なども必要となると思われるが、まだ検討が必要であると思われるため、本研究では神尾 (2002) のものを援用して議論を進めることにする。

まず、情報のなわ張り理論では、人間がある文の表す情報の認識をする際にその情報が当人（や話し相手）にとってどの程度「知っているか」「知らないのか」ということに着目する。そしてそのことは以下のような尺度によって表すことができると仮定をしている。



この尺度上において「1」はある情報を「よく知っている」「関わりが深い」「近い」ことを表し、「0」はその情報と「知らない」「関わりがない」「遠い」ことを表す。なお、この「1」「0」とは段階的な尺度であるとされている。

こういった規準で「関わりが深い」「近い」などの判断がなされるかは当然問題になるところであるが、それに関しては神尾の著作のなかでも早くから論じられている。以下に神尾 (2002) のものを挙げる。

- (7) a. 内的直接体験を表す情報
- b. 外的直接体験を表す情報

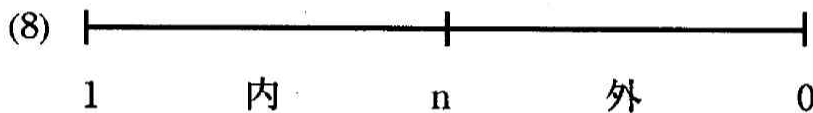
c. 自己の専門または熟達領域に関する情報

d. 自己の個人的情報

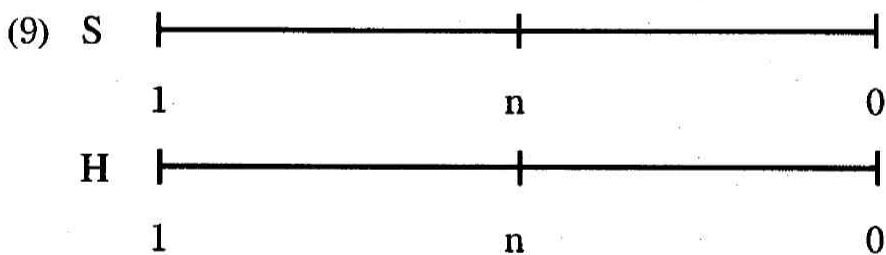
(神尾 2002、p. 32)

これらの情報は 1 に近い情報とされ、それ以外は 0 に近い（すなわち 1 から遠い）情報とされている。

上述のように 1 から 0 までは段階的ではあるが、ひとつの区切りとして n という点がこの尺度上に設けられ、 n より大きい場合が情報のなわ張り内であり、 n より小さい場合が情報のなわ張り外であるとされている。



そして、(少なくとも日本語においては) 話し手は自身に関してのみこのような尺度を持つのではなく、聞き手の尺度をも推測して認知しているものとする。(S は話し手、H は聞き手を表す。)



このように仮定するとき、これで表される状況と日本語の発話の形、つまり文末にどのような要素が用いられるか、に相関関係があるというのが情報のなわ張り理論の根幹をなす主張である。後述するように、話し手と聞き手に (9) で図示されるような、それぞれ「情報のなわ張り」と呼ぶべきものが存在し、それが言語使用に深くかかわっているというこの主張を本

論文では援用し、上述の「おめでとう」の振る舞いの説明を試みる。

神尾の情報のなわ張り理論はその成り立ち及び現在の理論の詳細のなかにおいて、日本語の文末形式との関連が大きくクローズアップされている。本論文の議論とは直接関係がないが、情報のなわ張り理論に対する理解をより深めるために、その詳細を一部説明する。神尾は、日本語の文末形式（の少なくとも一部）は、情報のなわ張り理論の枠組み内で説明されるべきであると主張している。例えば以下のような例の中に見られる文末形式である。（下線を引いた部分が神尾が問題にする文末形式である。）

- (10) a. お。今日はいい天気だね。
- b. なんか、アメリカでは大統領選挙で随分と盛り上がってるらしい。
- c. 彼は病気だ。
- d. ね。言ったとおり、あの店の料理はおいしいだろう？

これらの例では、言い切りの形（神尾は「直接形」と呼ぶ）や言い切りでない形（「らしい」を神尾は「間接形」と呼ぶ）が見られるのに加え、「ね」や「だろう」も使用されている。

これらの形式の使用は情報のなわ張り理論の枠組み内で適切に説明されるとき、その関係を以下のように規定した。（ダイアグラム中の S、H、n、1、0 は前述と同じ意味である。また A、B、BC などそれぞれのケースの名称である。）

(11) 状況と発話形 (日本語の場合)

状況	定義	発話形
A	$1 = S > H < n$	直接形
B	$1 = S = H$	直接ね形
BC	$1 = S > H \leq n$	だろう形
CB	$n \leq S < H$	だろう形
C	$n > S < H = 1$	間接ね形
D	$n > S \geq H$	間接形

(神尾 2002、p. 18)

上述したように文末形式の使用と本論文が目的とするところのものは、直接は関連していないため、ここではごく簡単に A と B と D のケースについて例を挙げながら簡単に見てみよう。まずは A の場合である。

(12) あの人 は 病気だ。

(同上、p. 20)

この文が使用される場面を想像してみると、話し手 S は「あの人 は 病気である」という情報を周知しており、その情報を知らない (と S が思う) 聞き手に伝える場合である。つまり、S は = 1 であり、H は = 0 すなわちある点 n 以下であると言え、直接形が使用される。

続いて B のケースを見てみよう。

(13) ここは空気が新鮮だね。

この場合は話し手・聞き手ともに直接の体験をしているため、「ここは空気が新鮮である」という情報に対して「1」の尺度をとり、ゆえに $1 = S$

= H となり、直接ね形が用いられる。

次に D のケースを見てみよう。

(14) 彼女は病気みたいだ。

この例では、話し手は「彼女が病気である」という情報に対して確証をもっておらず、したがって 1 から 0 までの尺度で言うとかかなり小さい値しかこの情報に対して持ち合わせていない。またこの言い方の場合、聞き手も同程度のもしくはそれ以下にしか小さい値を持っていないことは明らかで、ゆえに $n > S \geq H$ となり、「みたいだ」という間接形が使用されるのである。

以上、ごく簡単ではあるが、情報のなわ張り理論とそのひとつの適用例、すなわち日本語の文末形式の使用を見てみた。次節では、この情報のなわ張り理論を「おめでとう」の説明に援用可能であるかどうかを検討してみる。

3. 「情報のなわ張り理論」と「おめでとう」

第 1 節において観察した「おめでとう」が不自然であるという事実は、この情報のなわ張り理論の枠組みを用いれば非常に簡潔に説明可能である。まず「おめでとう」の使用例をひとつ見てみよう。

(15) (大学に合格した友人に向かって)

おめでとう！

この場合、「おめでとう！」と発した話し手にとって、聞き手である友人が大学に合格したという情報は大学に合格した聞き手自身よりは当然小さ

い値しかとらない。したがって：

(16) $S < H$

と表すことができる。言い換えれば、「おめでとう」と言えるひとつの状況はこの (16) のような状況であると言える。(以下、 S や H の値はいくつであるのかといった議論は本論文とは関連がないと思われるので、あくまで相対的に「より大きい値」「より小さい値」などという説明にとどめる。)

類似しているが少し状況が違う場合はどうであろうか。(例に付加されている # は、その例の使用がその場面において不適切であることを表すものとする。)

(17) (優勝チームのメンバーの 1 人が他のメンバーに向かって)

#おめでとう！

これは明らかに不自然な発話であるが、これを情報のなわ張り理論の枠組みで表すとどうなるであろうか。話し手である優勝チームのメンバーにとって、「おめでとう」という発言のもととなる情報、すなわち「優勝した」という情報は値が大変大きい。(「おめでとう」という情報ではなく、そのもとになっている「優勝した」という情報に対して値の大きさを測るものとする。この点に関しては後述する。) しかし、同時にその聞き手も同様に優勝チームのメンバーであるため、情報は聞き手にとっても大きな値をとる。したがって：

(18) $S = H$

となるはずである。ここからわかることは、「おめでとう」という発言は $S = H$ の場合には不適切なものとなるということである。

選手同士、すなわち $S = H$ の関係では「おめでとう」とは言えないが、コーチが選手に向かってなら「おめでとう」が使用できる。

(19) (優勝した選手のコーチが選手に向かって)

おめでとう！

これは、「優勝した」という情報に対しては、選手たちを指導したコーチも関わりが深い、やはり実際に試合に参加した選手の方がさらに関わりが深いということの表れであろう。つまり、(19) の場合も (15) と同様、 S の方がより値が大きく、 $S < H$ という関係であると言える。

しかし、その逆はなりたらず、選手がコーチに対して「おめでとう」とは言えない。

(20) (優勝した選手がコーチに向かって)

#おめでとうございます！

「優勝した」という情報に対する関わりという観点から見ると、話し手である選手 $S > H$ の方が聞き手であるコーチよりも関わりが深く、値が小さいと言える。すなわち S となり、このことから $S > H$ の場合は「おめでとう」は使用できないとわかる。

すなわち、「おめでとう」を発話する条件として、 H は S より「おめでとう」のもととなっている情報に関わりが深くなければならない ($S < H$) ということである。ここで、本論文の出発点であるヤクルトスワローズの若松監督のケースを情報のなわ張り理論を用いて説明してみよう。(1) の

例を再掲する。

(1) ファンの皆様、本当に、、、おめでとうございます！

ヤクルトが優勝したということはもちろん監督にとっても選手にとってもファンにとってもおめでたいことである。しかし、それぞれの人々にとって、その「優勝した」という情報との関わり方の度合いには差があり、監督や選手の方がファンよりももちろん関わりが高い。すなわち、監督が話し手(S)でファンが話し相手(H)である(1)の場合、話し手である若松監督の方が、聞き手であるファンよりも関わりが深く、よって値が大きいということである。つまり $S > H$ であると言える。この状況は、さきほど例証した「おめでとう」が使用しうる条件、つまり $S < H$ に当てはまらず、よって(1)の場面における「おめでとう」の使用は日本語の使用法的に言えば間違いであるということが言える。

続いてファンは監督からおめでとうと言われてはおかしいが、ファンでない人から言われるのは問題ないことを示す(3)の例を再掲してみよう。

(3) (ヤクルトの優勝を知った人が、嬉しそうにしている知人のヤクルトの大ファンに向かって)

ヤクルト優勝したんだってね。僕は野球のことはよくわからないけど、ま、とにかく嬉しそうだね。おめでとう。

この場合は、聞き手であるヤクルトのファン(H)の優勝に対する関わりは確かに若松監督より低いが、少なくともファン以外の人(S)よりは関わりがずっと深い。すなわち、(1)のケースとはかなり値が違うであろうが、それでもその相対的關係 $S < H$ が成り立っているため、「おめでとう」

は問題なく使えるのである。このように、情報のなわ張り理論の枠組みを使用すると、一見奇妙に見える「おめでとう」の使用例もまったく自然に説明される。つまり、情報のなわ張り理論は主に日本語の文末形式との関係を出発点として考察がなされてきたものであるが、「おめでとう」のような発言にも関わっていると言えるのである。

以上、「おめでとう」という表現の使用法に関して、情報のなわ張り理論から観察してきた。ここで当然、同様の表現ではどうなのかという疑問が浮かぶ。「ありがとう」という表現を例にとってみよう。まず言えることは、「おめでとう」と同様、関わり方に差、すなわち話し手と聞き手の値の大小に違いがあることがあるということである。

- (21) (コンクールで1等をとった弟子が世話になった恩師に対して)
 ありがとうございます。

この場合、弟子である話し手 S は当然恩師である聞き手 H よりもコンクールで1等をとったという事実に関して値が高い、すなわち $S > H$ の関係にある。 $S > H$ とは、「おめでとう」はいえない関係である。一方、次のような例もある。

- (22) (コンクールで1等をとったチームのメンバーが別のメンバーに)
 いろいろとありがとう。

これはまったく自然な用法と言えるであろうが、この場合は話し手も聞き手も「1等をとった」という情報とは関わり方は同じで、かなり値は高いがどちらの値も同じであると言える。すなわちこの場合 $S = H$ となると思われる。(22) が示すとおりの、 $S = H$ のケースにも「ありがとう」は使

えるようである。

別のケースを見てみよう。

(23) (コンクールで1等をとったチームの顧問が感極まってメンバーに)

がんばってくれてありがとう！

と言える。この場合、話し手である顧問 S は当然聞き手であるメンバー H より「1等をとった」という情報に関しては値が低く、すなわち $S < H$ であると思われる。(21) ~ (23) の例から言えることは、「ありがとう」には情報のなわ張りという観点からの制約は存在しないということである。別の言い方をすれば、「おめでとう」はやや特殊的に情報のなわ張り理論で説明される制約が存在するということである。

「おめでとう」を情報のなわ張り理論で説明している際に言及し、後述するとした点に戻ろう。神尾の一連の著作において展開された情報のなわ張り理論では、文の表す情報が話し手・聞き手にとってどのような関わり方をするか、つまり値が大きいのか小さいのかということが焦点となっていた。例えば：

(24) (東京の人が京都の人に向かって)

京都の人口は100万人ぐらいらしいね。

たとえば、情報のなわ張り理論の枠組みにおいて関連しているのは、「話し手は東京の人間であるので話し手にとって『京都の人口は100万人である』という情報の値はさほど大きくない」、「聞き手は京都の人間であるので聞き手にとって『京都の人口は100万人である』という情報の値は

（少なくとも話し手にとってよりは）大きい」ということである。つまり、「京都の人口は 100 万人である」という命題と話し手・聞き手との関わり方（＝値の大きさ）が問題とされている。

しかしながら、この論文でこれまで見てるように、「おめでとう」（や「ありがとう」）の場合、値の大きさを取りざたする情報は「おめでとう」ではなくそのもととなっている「優勝した」（あるいはそれぞれのケースに当てはまる適当な出来事）という情報との話し手・聞き手との関わり方・値の大小である。

つまり、別の言い方をするならば、「おめでとう」を正しく発話するためには：

1. 「ヤクルトが優勝した」という情報が、自分（話し手 S）と話し相手（聞き手 H）にとってどのような値をもつものであるか判断
2. その値に基づき、ある一定の制約（ $S < H$ ）をもつ「おめでとう」が使われることがある

という、いわば 2 つのステップが必要なわけである。この点は従来の「情報のなわ張り理論」が扱ってきた言語事象には見られないものであり、神尾もこのような事象には言及していないが、これまでの考察からすると関連は明らかであり、情報のなわ張り理論の新たな適用例・適用法例ではないかと思われる。

4. 他の表現

前節において、一見奇妙に見える「おめでとう」の用法が情報のなわ張り理論の枠組みを用いることによってうまく説明されることを見た。また、

「ありがとう」の例を用いて、必ずしもそのような制約がどの表現にも見られるわけではないことも見た。本節では、「おめでとう」のような制約があると思われる表現を他にいくつか観察してみる。

まず、次の例を参照してもらいたい。

(25) (箱根駅伝で沿道の観客が走る選手に向って)

がんばって！

これは駅伝を走る選手に向けて頻繁に発せられる言葉であり、当然この「がんばって」の使用には問題がない。しかし詳細に検討すると、「がんばって」にも「おめでとう」同様に複雑な面があることがわかる。

(26) (試合前のコーチが選手に向かって)

がんばれよ。

この例では問題なく使用されるが、以下の例が示すとおり逆の立場では同じことは言えない。

(27) (試合前の選手がコーチに向かって)

#がんばってください。

しかし、コーチには「がんばって」と声をかけられないのかと言えばそうではない。以下の例を見ていただきたい。

(28) (試合前に学長がコーチに向かって)

わが大学の名声がかかっています。がんばってください。

このように、学長はコーチに向かって「がんばって」と言うことができる。これは前出した「おめでとう」と同じ振る舞いであると思われる。

この「がんばって」の振る舞いは全て、「おめでとう」と同様に「がんばって」にも $S < H$ という制約があることで説明される。すなわち、 S と H の値の関係で表せば：

(25) 沿道の応援者 $S < \text{選手 } H$

(26) コーチ $S < \text{選手 } H$

(27) #選手 $S > \text{コーチ } H$

(28) 学長 $S < \text{コーチ } H$

このように、4つの使用例は全て「がんばって」も「 $S < H$ の関係のなかで発話されなければならない」という制約があるとすることで説明される。

その他、情報のなわ張り理論の枠組みで説明される表現は少なくともいくつか存在するようである。たとえば、前述したように「ありがとう」は違うが、その受け答えとして頻繁に使用される「どういたしまして」は「おめでとう」や「がんばって」と同様の振る舞いがあるようである。

(29) (B が A の落とした鉛筆を拾って手渡す。)

A: あ、どうもありがとう。

B: どういたしまして。

これはごく普通のやりとりであるが、一方でお礼に対する受け答えとして「どういたしまして」が使えない以下のような場面もある。

(30) (A は B の経営する店で品物を買った。)

A: どうもありがとう。

B: #どういたしまして。

B は実際に品物の仕入れ、A への応対ならびに品物の包装などを行っているはずであるから、お礼を言われてももちろん問題ないはずであるが、そのお礼に対して「どういたしまして」と答えると大変滑稽、もしくは客である A は怒りだすであろう。この違いはどのように説明可能であろうか。

(29) と (30) の違いは、やはり情報のなわ張り理論の枠組み内で容易に捉えられる。(29) における「どういたしまして」の発言のもとになる情報「鉛筆を拾った」という行為は A (= S) にとってももちろん関わりの深い事柄である。それと同様に B (= H) にも関わりがあるが、S ほどではない。すなわち $S > H$ の関係にある。

しかし一方、(30) の場合、「どういたしまして」のもととなる情報「A が品物を買った」という情報は話し手と聞き手両者に対して関わりが高い。したがって $S = H$ であり、(29) の場合と関係が異なる。「どういたしまして」の使えるなわ張り関係を $S > H$ であると仮定すれば、この両者の違いはたちまち説明可能になる。(30) では確かに店の人間である B は、自分の行った行為（品物を売ったこと）に際して「どういたしまして」と発言するのはおかしいが、次のように相手が変われば「どういたしまして」が使える。

(31) (客が帰った後、共同経営者である C が店にやってきた。本来、15 分前に C が店番をする予定であったが、C は遅刻した。)

C: あ、お客さんだったんだ。A さんだね。例の品物、渡しておいてくれた? ありがとう。

B: どういたしまして。

この例における「どういたしまして」の使用にはまったく問題がない。これは話し手である B と聞き手である C の関係が、「品物を A 氏に売った」という行為に関して $B > C$ (すなわち $S > H$) であるからと説明可能である。その他、同様の振る舞いをする表現には「よろしく」もあると思われる。

(32) (A と B は明日大事な試合に出場する)

A: 明日は試合だな。

B: ああ、そうだな。#明日の試合、よろしく。

「よろしく」という発話のもとになる出来事「明日の試合に出場する」という情報は当然一緒に出場する A と B に等しく関わりの深いことであるが、それにも関わらず B が「よろしく」というと明らかに B は自分とは関わりが低い・値が低いことを言っているかのような印象を与える。つまり、「よろしく」を言うには「おめでとう」と同様に $S < H$ でなければならないということがわかる。

5. おわりに

本論文を通して、情報のなわ張り理論というもの、つまり神尾 (2002) が著書の冒頭部分でも説明したように (7 ページ)、人間の行動についてまわる「なわ張り」という考え方・概念が、言語の使用にも影響しており、そしてその一端として「おめでとう」「がんばって」「どういたしまして」「よろしく」などの表現の使用にもなわ張りの意識が深く関わっていることを見た。よって、従前より提唱されている「情報のなわ張り理論」がそれらの表現の一見奇妙な振る舞いに明快な説明を与えることが明らかとなった。

「ありがとう」などの、なわ張りに関連がないと思われる表現はどうしてそうなのかに関しては今後の課題としたい。

情報のなわ張り理論は、人間のなわ張り意識（およびそれと関連するもの）と言語使用との関わりを捉えた理論であり、大変興味深い理論である。この理論がこれからもますます発展していくことは人間の認知や言語が解明されるうえで大変貴重なことであるし、本論文の試みもその一環として捉えられれば幸いである。

参考文献

- 伊藤丈志 (2003) 「談話における情報のなわ張り—肯定応答文形式の分析—」『沖縄大学人文学部紀要』第4号、69-83頁。
- 岩畑貴弘 (1991) 「情報のなわ張り理論から見た「はい」と「ええ」」『獨協大学英語文化研究』第4巻、89-99頁。
- 岡本真一郎 (1996) 「情報への関与と文末形式—「情報のなわ張り理論」の批判的検討と新モデルの提案」『心理学評論』第39巻2号、168-204頁。
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』東京：大修館書店
- (2002) 『続・情報のなわ張り理論』東京：大修館書店
- 神尾昭雄、高見健一 (1998) 『談話と情報構造』東京：研究社出版
- 金水敏 (1991) 「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学文学部紀要』第18巻、23-41頁。
- 坂本明裕 (1992) 「情報の認識パターンと言語形式」『青森明の星短期大学紀要』第19号。
- 中園篤典 (1992) 「情報のなわ張り理論から見た対話の構造：聞き手の相づちを中心に」『日本語と日本文学』第16号、39-49頁。
- 松浦千佳子 (1992) 「失文法患者の「ね」—情報のなわ張り理論から」『名古屋大学言語学論集』第8巻、59-80頁。
- 平香織 (2004) 「終結語尾지 (-ci) の意味と用法：情報のなわ張り理論の観点から」『対照言語学の新展開』佐藤滋・堀江薫・中村渉編、東京：ひつじ書房
- 服部幹雄 (2004) 「不同意の発話行為における中間言語語用論—日本人英語学習者の場合—」『名古屋女子大学紀要（人・社）』第50号、231～236頁

房仕君 (2000) 『あいさつ言葉の日中対照研究—イベントの始まりと終わりを中心に』

神戸大学修士論文

Austin, John L. (1961) *How to Do Things with Words*. Harvard University Press.

Kamio, Akio. (1979) "On the notion speaker's territory of information: A functional analysis of certain sentence-final forms in Japanese." In G. D. Bedell, E. Kobayashi, M. Muraki eds. *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha.

———. (1994) "The theory of territory of information: The case of Japanese," *Journal of Pragmatics* 21: 67-100.

———. (1995) "Territory of information in English and Japanese and psychological utterances," *Journal of Pragmatics* 24: 235-264.

———. (1997a) "Evidentiality and some discourse characteristics in Japanese," Akio Kamio (ed.), *Directions in Functional Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins, 145-71.

———. (1997b) *Territory of Information*. Philadelphia: John Benjamin.

———. (2001) "English generic *we*, *you*, and *they*: An analysis in terms of territory of information," *Journal of Pragmatics* 33: 1111-1124.

Muraki, Masatake and Masatoshi Koizumi (1989) "Territorial relations and Japanese final particle *ne*." In Kazuko Inoue (ed.), *Report on Theoretical and Empirical Studies of the Properties of Japanese in terms of Linguistic Universals*. A Grant-in-aid for Scientific Research, Ministry of Education, Science and Culture, No. 6006001, 123-130.